

資料名「ローズマインド」
テーマ（郷土を愛する心を育てるための工夫）

学校名（ 福山市立城東中学校 ）

- 1 学 年 第3学年
- 2 主題名 郷土を愛する心 4－（8）
- 3 ねらい 主人公がばら祭ボランティア活動で気付いたことを考えることを通して、地域社会の一員としての自覚をもって、郷土を愛し、郷土の発展に努める心情を育てる。
- 4 資料名 「ローズマインド」（自作資料）
- 5 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	留意点（☆評価の観点）
導 入	1 福山市について考える。	○ 福山市といえば何が有名ですか。 ・ 鞆の浦 ・ 下駄 ・ うずみ ・ くわい ・ ばら	○ 思いつくものを出させ、交流することで、福山への関心を高める。
展 開	2 ボランティア活動をする前のナオキの思いを考える。	○ 「まあいいや。行こ行こ。」と言ったナオキはどんなことを考えていただろう。 ・ 内申に書いてもらうためだ。 ・ Tシャツに書かれてある文字の意味なんてわからなくてもいいや。 ・ ゴミを拾えばいいんだろ。	○ 資料を読んだ後、当時の写真を使い被害状況を説明し、福山空襲について知らない生徒の理解を助ける。 ○ 参加前の二人の言動に触れることで、ただゴミを拾うことだけが自分たちの仕事だと思っているナオキの気持ちをおさえる。
	3 ナオキがなぜ変わったかを考える。	○ 「もう一回公園の中、回ってみないか」とナオキが言ったのはなぜだろう。 ・ 福山空襲のことを知り、何か貢献したいと思った。 ・ ばら祭りにかける思いを知り自分もその輪の中にいることに気付いた。	○ ばら祭の由来を知ったナオキがとった行動から、ばら祭をつくりあげてきた先人や高齢者たちの努力に気付いたナオキの気持ちに迫る。
	4 ナオキが見つけたことを考える。	◎ 「そうかあ！」そう言ったナオキは何を見つけることができたのだろう。 ・ 悲劇から立ち上がって今の福山がある。 ・ 昔の人の思いが詰まっている。 ・ ばら祭を誇りに思い、これからも引き継いでいかななくては。 ・ ばら祭を継承してくことが福山の発展にもつながる。	○ Tシャツに書かれた英語の意味を板書することで、ナオキの気持ちを考えやすくする。 ・ Step up=促進する、増す ・ Find something=何かを見つける ○ ナオキの心の変化を考えることを通して、ばら祭やローズボランティアといった伝統を引き継ぐことが、福山市の誇りであり、郷土の発展につながることに気付かせる。

<p style="text-align: center;">終 末</p>	<p>5 感想を書く。</p>	<p>○ 今日の感想を書こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今まで軽い気持ちでローズボランティアに参加してきた。来年は福山のためにがんばる。 ・ 福山の復興にかけた人たちの気持ちを受け継いでいくぞ。 	<p>○ 板書内容の中からねらいに迫る発言を振り返らせることで、郷土のためにという視点で感想が書けるようにする。</p> <p>☆ 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、郷土の発展に努めようとする意欲が高まっている。</p>
--	-----------------	--	--

活用に向けたポイント

1 生徒の実態

「道徳教育改善・充実」総合対策事業の生徒アンケート5月実施の結果を見ると、「今住んでいる地域の行事に参加している」の値が58.0%、「今住んでいる地域の歴史や自然について関心がある」の値が58.7%であった。全23項目中、2番目と3番目に肯定的評価が低かった。このことから、住んでいる地域とのつながりが比較的低いという実態が明らかとなった。

2 教材開発及び指導過程の工夫

福山空襲について小学校や中学校で学んだ生徒が少ないため、補助的な教材として、福山空襲の写真（または絵）を使う。また、当時の被害状況を分かりやすく黒板に掲示する。

ローズボランティアで実際に参加者に配られたボランティアTシャツを用意し、ボランティア活動をする時の姿をイメージさせる。また、“STEP UP ROSEMIND “や “You can find something!” の文字も実際に見ることでより現実的に考えを深めさせる。

板書では、主人公が、今までの自分の考え方を後悔する気持ちや、先人たちの思いや行動に感謝・感動する気持ち、またこれから地元福山でどう生きていこうとしているかなどの気持ちを、分かりやすく板書していく。

3 発問の工夫

主人公ナオキの行動や言葉に注目して、その心を考える。具体的には、①ボランティア活動をする前、②ばら祭の意味を知ったとき、③Tシャツの文字から気付いたときの三つの場面から主人公の変容を考え、ねらいに迫る。

4 生徒の反応

福山空襲について何人の生徒が知っているのか、授業導入時に聞いてみると、各学級3～5人程度だった。小学生の時、習ったことのない生徒、もしくは習ったけど覚えていない生徒が多数いることが分かった。

中心発問は、生徒にとって考えるのがやや難しそうだった。find something にかけて「何を見つけたか」という言葉を使って発問した。生徒からは、「ばらの心」「昔の人（始めた人）の思い」「平和の心を広げること」「平和を願う心」などが出てきた。

資料の内容が分かりやすかったかどうかは、授業後の感想を読むと、分かりやすいと書いている生徒の方が多かった。

5 活用に当たってのポイント

導入に関しては、有名な（誇れる）福山の物や場所などを尋ねると、活発に発表があり、前向きな雰囲気ですぐに授業に入っていくことができた。

福山空襲について知らない生徒も多く、総務省「一般戦災ホームページ」などから福山空襲の情報を収集し、分かりやすく伝える。

基本発問では、内申書のことを気にして、ただ何となくばら祭りに参加した主人公の気持ちをおさえる。また、助言者の「碑文」と「祖母の言葉」から主人公の心の変容した場面に着目させ、ばら祭りがなぜ始まったのかに気付いた主人公の気持ちの変化に迫る。

中心発問では、ばら祭りをつくってきた先人や高齢者たちの思いに気付き、感謝し、それを引き継ぎ発展させようとする主人公の気持ちに迫ることで、自らも郷土の発展のために努めていこうとする心情を育てていく。

「ローズマインド」

五月十七日(土)・十八日(日)、今年もぼくたちのまち福山で『ばら祭』が開催された。小さい頃から慣れ親しんできた祭りだけど、今年の『ばら祭』はぼくにとって今までとは違う祭となった。

ぼくは『ばら祭』に小さい頃から家族と一緒によく訪れていた。何千本(バラ公園には五五〇〇株、緑町公園には五〇〇〇株)と咲き誇る美しいばらを見るのはもちろん、特設ステージで練り広げられるローズコンサートや、歩行者天国になった路上で行われるローズパレードを見るのも楽しみの一つだった。また、会場内いたるところに設置された飲食スペースでファーストフードを食べることも楽しみで、どちらかと言えば、ばらより団子、というのが正直なところだった。

ただ、中学生になってからは部活動が忙しく、ここ二年間は足が遠ざかっていた。ところが、二年生の修了式が迫ってきた三月下旬、友だちのトモヤから、

「ナオキ、ボランティア委員会が来年度のばらボラの希望者を募るんだってさ。参加してみないか？」と誘いを受けた。部活動がないわけではなかったが、トモヤの

「ボランティアは午前か午後のどちらかだけでいいんだってさ。来場者が少ない時間帯には屋台で好きなものを買って食べることもできるって卒業した三年生たちが言ってたよ。それにさ、ボランティアくらいしておかないと高校入試のとき、内申に書いてもらうことなくて困るだろ。」という言葉に心を動かされ、

「まあ、二日間くらいなら部活動を抜けても大丈夫か。久しぶりにあの雰囲気味わうのも悪くないし。」そう思い、ばらボラに申し込むことにした。

『ばら祭』当日、ボランティア参加者に配られたピンクのボランティアTシャツを着たぼくとトモヤは中央公園に向かった。

「このTシャツなんでピンクなんだ？だっせーよなあ。それに胸にも背中にも何か文字が書いてあるしさあ。えっ、なににない？《You can find something!》…ごみを見つけて拾ってこと？トモヤ、背中にはなんて書いてある。」

「え〜っと《STEP UP ROSEWIND》だって。ばらの心をステップアップするってこと？なんだそれ。」

「よくわかんね。まあいいや、行こ行こ。」

文句を言いながら、八時三十分の集合時間ぎりぎりに着いたぼくたちは、さっそく担当者から仕事内容についての説明を受けた。

「君たちにはこの二日間、八時三十分から十二時三十分までの間、クリーンパトロール隊として活動してもらいます。クリーンパトロール隊は会場内に落ちているごみを拾って回るのが主な仕事です。ばら祭の開催中、会場を訪れる人たちに気持ち良く祭を楽しんでもらえるよう、会場内をきれいに保つ協力をしてください。」

説明後、大きなビニール袋を一人一枚ずつ渡されたトモヤとぼくは

「二日間午前中だけとはいえ、ずっとごみ拾いか。だるいよなあ。でも、これも内申のため。がんばりますかあ。それに、人が少ない時間帯には好きなものを買って食べることができるとな。」

そう言ってビニール袋をつまみ会場内を回ることにした。

ここ中央公園はバラ公園・緑町公園と並んで『ばら祭』の会場の一つとなる。福山駅からバラ公園・緑町公園まで行く途中に中央公園はあり、毎年かなりののにぎわいを見せている。しかし、まだ時間が早いせいか来場している人はまばらで、むしろピンクのTシャツを着たボランティアの人たちのほうが多くいらいだった。ぼくたちは、ビニール袋を持つてのんびりと会場を回った。当然、まだごみも落ちておらず、

「思っていたより楽な仕事だな。楽勝！」

そう言ってトモヤと顔を見合わせると、にんまり笑った。

そうこうしているうちに、時刻は十一時近くになっていた。その頃になると来場者の数は急激に増え始め、それに比例してごみの量も増えてきた。分別ごみを収集するためのごみ箱が設置されたゴミステーション周辺の地面にもごみが目立ち始め、

「ごみステーションがすぐ近くにあるんだからそこへ捨てに行けばいいのに。これじゃ俺たちの仕事が増える一方だよ。」

トモヤはブツブツと文句を言っている。

「あーあ、トモヤの言うとおりだよ。やっつけられないよ。」

そう思いながら会場を歩いていると、特設ステージの裏手に何やら人の形をした銅像が建てられているのに気が付いた。気になったぼくは近づいてみた。するとそれは人の銅像であり、実は一体ではなかった。赤ちゃんを抱いたお母さんと、その横を離れまいとしている六歳くらいの子どもの銅像だった。その銅像の足元には「追憶」と刻まれた石碑と、その傍らには元福山市長、立石定夫さんの碑文が刻まれた石碑が建てられていた。碑文にはこう書かれていた。

碑文

第二次世界大戦の終焉を告げんとする昭和二十年八月八日夜 米軍機の焼夷弾投下により市街地は一瞬にして火の海と化した

今ふるさとよみがえり生成発展をつづけるとき

ここに尊い犠牲となられし御霊の冥福を祈り平和を祈念するため慰霊の像を建立し永く後世に伝える

昭和四十七年三月建立 福山市長 立石定夫

そういえば、子供の頃、祖母からこんな話を聞いたことがあった。

「ナオくん、おばあちゃんが小さい頃、福山でも空襲があつたんよ。おばあちゃんが住んでいたところは街から離れていたんだけど、上空が真っ赤に染まってるんが見えて、とっても怖かったんよ。空襲でたくさんの人たちが亡くなったんよ。それでな、亡くなった人たちのことを思い、福山が早くもとのような元気なまちに戻りますようにって願う人たちが今のバラ公園に千本のバラを植えてな、そこから始まったんが『ばら祭』なんよ。」

ぼくは、祖母から聞いた話をトモヤに伝えた。トモヤはしばらく黙っていた。

「トモヤ、もう一回公園の中、回ってみないか。」

「そうだな。」

そう答えたトモヤとぼくは、今歩いてきたところをUターンして、ごみ拾いに向かった。

芝生の上にごみを捨てようとしている人を見つけると、そばに駆け寄り、

「そのごみください。」

と思い切って声をかけた。声をかけられた人は、

「ありがとう。」

とにっこり笑ってお礼を言ってくれた。その後もごみを捨てようとしている人やごみを持っている人を見つけるとそばに寄って声をかけた。すると、きまpping

「ありがとう。」

と答えてくれる。ばら祭を訪れた人たちと一緒に祭を盛り上げている自分がここにいる。

どれくらい作業を続けたらだろうか。ぼくの前でかがんでごみを拾っていたトモヤの背中にふと目が留

まった。《STEP UP ROSEMIND》

「そうかあー!」そう言っって自分の胸を見た。そこに書かれているのは《You can find something!》

思わず見上げた時計台の針はもうすぐ十三時を指そうとしていた。

※ばらボラ＝正式名称は「ローズボランティア」



「ローズマインド」資料分析

1	主人公	ナオキ
2	変容	軽い気持ちでローズボランティアに申し込む（内申のため）⇒碑文と祖母の話からばら祭の意義について考える⇒Tシャツのロゴから気付くばらの心（郷土を大切に する心）
3	山場	Tシャツに書かれた《STEP UP ROSEMIND》《You can find something》を 見てその意味に改めて気付く
4	助言者	Tシャツのロゴ
5	内容項目	郷土を愛する心 4－（8）

〈分析図〉

